

いに日本特異のものに向い、古事記、日本書紀など國史の編纂も行われ、また淳仁天皇の時には、古くからの日本人の歌を集めて萬葉集が集成せられております。佛教にしましても、金光明經とか仁王經などが盛んに行われ、國家護持の立場において尊信せられる状態を呈しました。

以上を総合して申し上げますと、奈良朝の燦然たる文化は、一方では唐の文化の模倣を盛んに行いながら、他方ではこれを消化し、これに日本人の嗜好や工夫を加えて、日本特有の文化を作り出す勢に進みつつあつたものと言ひ得ると思ふのであります。

凡そ、他國他民族の文化を取り入れて自己の文化を發達せしめる場合に、その當初において先ず模倣が行われるということは、當然の順序であります。時間の経過につれて、だんだんそれを消化して自分のものとし独自の新文化を作り出すのに培うことに進むべきであります。その新文化を作り出し得るか否かが前にも申し述べましたように、國民の文化性の有無に由る次第なのであります。日本の文化史上において、外國文化の影響刺戟を受けて、飛躍的に發展したと認められている飛鳥・奈良の兩時代は、只今まで申し上げましたように、外國文化の模倣が甚だ盛んであつた時代と見なければなりません。この勢は平安の初期においてもなおつづくのであります。その後、遣唐使を中止し、公けの交通をやめたのにつれて、唐文化の流入は衰え、ここに日本文化の獨自性が擡頭して、從來とその性質のやや異なる文化が發揮されて來たのであります。これが平安朝文化の性格であると思ひます。こういう意味から考えますと、飛鳥・奈良兩時代の文化は、日本の文化發達史上の初期を劃するものであると共に、平安文化への過渡期であるとも言い得ると思ひます。